

湖中大鳥居の誕生

——白鬚神社の絵はがきを素材として——

田 中 知 音
渡 部 圭 一

一、問題の所在

滋賀県高島市鵜川に所在する白鬚神社は、『日本三代実録』貞観七年（八六五）正月十八日条を初見とする、近江を代表する古社のひとつである。⁽¹⁾ 鵜川の集落は、南北にのびる比良山地の北端が湖岸間近にまで迫る一帯に所在しており、その山並みと湖岸との間のわずかな平地に建つ白鬚神社は、まさに琵琶湖と目と鼻の先の位置にある。さらに同社には、拝殿間近に建つ鳥居に加え、神社正面の沖合六〇メートルほどの位置にもうひとつの鳥居がある。安芸の宮島の海中鳥居を思わせる、いわゆる湖中大鳥居である。

近年、白鬚神社の鳥居は、琵琶湖を代表する「映えスポット」として、多くの観光情報サイトなどで取り上げられている。⁽²⁾ おだやかな水面に浮かぶ朱の鳥居はたしかに幻想的で、写真撮影スポットとして人気が高い（写真1）⁽³⁾。一方、境内と湖岸の間には幹線道路である国道一六一号線が走り、鳥居を間近で撮影しようと横断



写真1 白鬚神社の湖中大鳥居
(2014年5月17日、金尾滋史氏撮影)

する観光客の交通事故が多発して問題視されている。⁽⁴⁾湖岸に下りる階段の封鎖、境内側の撮影台の設置、⁽⁵⁾それでも後を絶たない横断者への呼びかけなど、現地では懸命の対策が重ねられている。

ところでこの鳥居の歴史は意外にも新しい。白鬚神社の公式webページには、「この神秘的な鳥居が実際に建てられたのは昭和十二(一九三七)年、大阪の葉間屋小西久兵衛氏の寄進によるもので、現鳥居は昭和五十六(一九八一)年にこれを建て替えたものである」と明記されており、⁽⁶⁾現地に赴けば記念碑や案内板でこの経緯を詳しく知ることができる。ところが従来の琵琶湖をめぐる近代の観光を扱った研究のなかで、この鳥居の「出現」の意味に言及したものはほとんどないのが現状である。

昭和戦前期に、いわば忽然と現れ、絶大な人気を博することになったこの美しい鳥居の造立には、どのような背景があるのだろうか。この鳥居には何が期待され、誰にどのように見られていたのであるうか。この問題に迫るため、本論文では絵はがきを資料として、昭和戦前期を挟む時期の白鬚神社をめぐる「まなざし」の変遷を検討する。当時の絵はがきは観光地の土産物として盛んに販売されたもので、観光地を訪れる人々に期待された光景がいかなるものであったのかを知る有力な手がかり

となると考えられるからである。

琵琶湖の観光といえは、まず参照されるのは「近江八景」⁽⁷⁾をめぐる歴史学の研究成果である。ここでは近江八景の詩歌などの知識が、近世に著しく増加する書物を通して一般庶民の教養となり、日本を代表する名所として知名度を獲得していく過程⁽⁸⁾、さらには近江八景見物が観光ルートに組み込まれ、現地でも観光客の受け入れ態勢が整っていく過程⁽⁹⁾などが精緻に明らかにされつつある。ただ近世の近江八景の「その後」といべき近代の動向は、まだ十分に扱われているとはいえない。

そうしたなかで注目されるのは、近代の汽船による湖上遊覧と近江八景との関わりである。湖上輸送が鉄道に置き換わる明治二十年代以降、汽船会社が観光に舵を切り、そこで活況を呈した湖上遊覧のなかで重視されたのが近江八景めぐりであった。⁽¹⁰⁾近年では、木津勝が絵はがきを資料として、各景の撮影対象の変化を論じている。同論文では、比較的后発の観光地である湖西の近江舞子が、太湖汽船の寄港地として整備され、近江八景絵はがきの「比良暮雪」の被写体として取り込まれていく傾向などが指摘されている。⁽¹¹⁾

このように比較的后発の観光地が台頭し、また湖上遊覧のようになままったく新しい観光手段が登場するなかで、伝統的な近江八景を含む琵琶湖の観光はどのように展開していくのであろうか。これを考察する上で、湖中大鳥居という新しい名所をめぐる動向は好個の事例を供するものと考えられる。以下では、絵はがきの資料的な性格をふまえた上で、白鬚神社を含む絵はがきの傾向、およびそこで被写体となる神社の景観の特徴を分析し、これを近代の琵琶湖観光の歴史のなかで位置づけていくことにしたい。

二、フィールドと資料

聞き取りによると、白鬚神社の氏子は鵜川地区に住む四十数軒の家々であるが、それ以外に「白鬚神社延齡会」という広域的な講組織があり、現在も四三〇〇人ほどの成員を有しているという。こうした広い信仰圏が



写真2 白鬚神社大鳥居移設記録
(2022年6月26日、古谷涼撮影)

近世以来のものであることは、同社の境内に立つ多数の石造物をみることでも理解できる。近世の紀年銘をもつものは、灯籠だけで一〇基を数えるが、このうち寄進者の所在地がわかる五基のうち四基は京都や福井の住民であって、早くから白鬚神社に遠隔地の信仰的講集団が存在したことが窺われる⁽¹²⁾。

湖中大鳥居の成立過程は、白鬚神社境内の「白鬚神社大鳥居移設記録」と題された昭和五十六年（一九八二）三月の解説板（写真2）によって概要を知ることができる。それによると「大鳥居は、「朱塗りの鳥居が波のまに見え隠れした」との社誌の伝承をうけて、大阪の葉問屋、小西久兵衛氏の寄進により、昭和十二年に建立された」ところが戦後の琵琶湖総合開発による水位低下対策として、湖中大鳥居の景観を維持するため、それまでより一五メートルほど



写真3 鳥居復興碑(2022年6月26日、古谷涼撮影)

沖の現在地に移動、新築されたという経過が判明する。

一方、昭和十二年(一九三七)の小西久兵衛による建立の経過は、やはり境内の「鳥居復興碑」という大形の記念碑(写真3)によって知ることができる。その銘文によると、古来より琵琶湖の西岸には猿田彦命をまつる白鬚神社があり、琵琶湖の水が増減した時に、鳥居が隠れたり顕れたりしていたといういわれがあった。そこ

で大阪市東区道修町堺筋東にすむ篤志家の小西久兵衛が湖中大鳥居を建て、神霊の慰めとした、とある。⁽¹³⁾この銘文は昭和十二年十月付けで、記念碑と鳥居の建立は同時であったようである。

昭和十二年の鳥居建設の前提となった湖中大鳥居の説話は、実際に中世後期ころのいくつかの史料にみえている。⁽¹⁴⁾そして少なくとも昭和十二年当時の認識としては、湖中大鳥居の造立はあくまで「復興」であったことがわかる。鳥居の寄進や造立の経過などはなお追究の余地があるが、さしあたり本論文では、この昭和戦前期を中心に、湖中大鳥居のある景観がもっていた意味を探ることにしたい。なお、以下では昭和五十六年竣工の現在の鳥居に対して、昭和十二年造立の鳥居を「旧鳥居」とよぶことにする。

本論文の主な資料は、この旧鳥居の前後の時期を中心に、白鬚神社を被写体として制作された絵はがきである。表1に、ここで

絵はがき資料一覧

はがき		備 考
解説文	被写体	
—	③船あり	絵はがきにスタンプ「琵琶湖 遊覧記念」。外袋にスタンプ「琵琶湖遊覧記念」「大津屋旅館」
—	①	外袋にスタンプ「遊覧記念 湖南汽船会社 明治丸」「湖南汽船 3.5 20 明治丸」各2個。絵はがきにスタンプ「遊覧記念 湖南汽船会社 明治丸」
—	②	—
—	③船あり	—
—	③船・橋板あり	—
○	④	—
—	③船あり	—
—	②参詣者入り	—
○	④	—
—	③ハサ掛けあり	絵はがきにスタンプ「竹生島 3.8.17 遊覧記念」
—	③船あり	—
—	①	外袋にスタンプ「びわ湖・鳥めぐり 京阪丸」
—	⑤汽船あり	外袋に「琵琶湖名勝案内図」を掲載
○	④	—
○	③船あり	外袋裏面「大津矢部八景堂発行」
—	③船・橋板あり	—
—	③船・橋板あり	絵はがきにスタンプ「石山遊覧記念」
—	④	—
○	①	—
—	③船・橋板あり	—
—	②参詣者入り	絵はがきにスタンプ「12.3.10 近江八景めぐり 平安丸」、外袋裏面「八景堂」
—	①	外袋裏に「16枚」と記入
—	③船あり	—
—	③船あり	—
—	⑤汽船あり	—
○	③船あり	外袋裏面「田中大湖堂製」
—	②	外袋に「昭和十四年八月廿七日」と記入
—	④	外袋の細字は省略
—	⑤	外袋裏面「滋賀県」。通信欄下部に「滋賀県観光協会」と記載
○	④湖中大鳥居あり	—
○	⑤	—
—	⑤	—
○	④	—
—	④	—

表1 本論文で検討する

No.	類型	時期	外袋の表面タイトル	白鬚神社の絵	
				キャプション	
1	鳥めぐり	C期	琵琶湖 景勝	琵琶湖畔 白鬚神社	
2	鳥めぐり	C期	鳥めぐり琵琶湖名所	(琵琶湖名所)白鬚神社	
3	鳥めぐり	C期	最新四色刷 琵琶湖風景	(琵琶湖風景)白鬚神社	
4	鳥めぐり	C期	琵琶湖	琵琶湖畔 白鬚神社	
5	鳥めぐり	C期	高級原色版 琵琶湖	(近江琵琶湖)白鬚神社	
6	鳥めぐり	C期	鳥めぐり 琵琶湖風景	(琵琶湖名所)湖上より見たる白鬚神社	
7	鳥めぐり	C期	最高級写真 嶋めぐり 定価金貳拾銭	(琵琶湖島廻り)白鬚神社	
8	鳥めぐり	C期	(外袋欠)	(近江名所)白鬚神社	
9	鳥めぐり	C期	(外袋欠)	(琵琶湖名所)湖上より見たる白鬚神社	
10	鳥めぐり	C期	(外袋欠)	(琵琶湖島廻り)白鬚明神	
11	鳥めぐり	D期	心身厚生の清境 びわ湖勝景	琵琶湖岸 白鬚神社	
12	鳥めぐり	D期	琵琶湖鳥めぐり	(近江)白鬚神社	
13	鳥めぐり	E期	琵琶湖の観光 総天然色写真	(琵琶湖)白鬚明神浜の大鳥居	
14	鳥めぐり	不明	琵琶湖 鳥巡り御記念 太湖汽船株式会社	琵琶湖名所 白鬚神社	
15	十六景	C期	特製写真版 近江 名勝	(琵琶湖名所)湖上より見たる白鬚神社	
16	十六景	C期	最新式高級版原色版 琵琶湖 十六景	(近江琵琶湖)白鬚神社	
17	十六景	C期	最新式高級版原色版 琵琶湖 十六景	(近江琵琶湖)白鬚神社	
18	十六景	C期	鳥めぐり 琵琶湖風景 最新式プロー式	白鬚明神 全景	
19	十六景	C期	琵琶湖風景 近江八景と鳥めぐり 十六枚入	(琵琶湖名所)	
20	十六景	C期	最新写真版 近江八景 琵琶湖 十六景	白鬚神社	
21	十六景	D期	高級版 琵琶湖 十六景	(近江琵琶湖)白鬚神社	
22	十六景	D期	琵琶湖風景	近江 白鬚神社	
23	十六景	D期	近江十二景	(近江八景)白鬚神社	
24	十六景	D期	(外袋欠)	琵琶湖岸 白鬚神社	
25	十六景	E期	琵琶湖十六景	(琵琶湖)白鬚明神浜の大鳥居	
26	十六景	不明	近江八景	(白鬚神社)	
27	変則	D期	近江舞子風景	近江白鬚神社	
28	変則	D期	近江百景	近江百景 ④白鬚神社	
29	変則	D期	湖国点描	白鬚神社社前	
30	変則	D期	琵琶湖随一・湖畔の名勝 観光の高鳥	高鳥町の観光 白ひげ神社	
31	変則	E期	風光の美・国定公園 琵琶湖	白鬚神社、大鳥居	
32	変則	E期	(外袋欠)	("びわこ"の横顔)朝陽に輝く白鬚神社大鳥居	
33	変則	不明	比叡山名勝 近江名勝	(琵琶湖名所)湖上より見たる白鬚神社	
34	不明	C期	(外袋欠)	琵琶湖島廻り 明神崎と白鬚神社	

はがき		備 考
解説文	被写体	
○ ④		5枚の各絵はがきにスタンプ「白鬚神社印」
— ⑥岩戸		
— ①		
— ⑥燈明台		
— ②		
— ④		—
— ⑥燈明台		
— ①		
— ③船・橋板あり		—
— ①		
— ⑥境内		
— ⑥御手植樹		
— ⑥岩戸		
— ⑥名木権		外袋を折り込んだ裏面に由緒書を掲載
— ④湖中大鳥居あり		
— ⑤		
— ⑥本殿内部		
— ①		
— ⑥社務所貴賓室		—
— ④		
— ⑥社務所貴賓室		
— ⑥社務所全体		—
— ④		
— ⑥社務所全体		
— ⑥社務所貴賓室		外袋に「うみよりも深き恵みかな人のよはいをし良す白鬚の神(正三位千種有功)」と記載
— ④湖中大鳥居あり		
— ⑤		
○ ⑥若宮神社		
○ ⑥豊受大神宮ほか		

ット(変則と略記)、不明に区分して示した。「時期」欄はC～E期(本文参照)と不明に区分して示した。絵①～⑥(本文参照)に区分して示し、一部の補足事項を併記した。「備考」欄には、外袋の表面タイトル以外

湖中大鳥居の誕生

No.	類型	時期	外袋の表面タイトル	白鬚神社の絵	
					キャプション
35	単独	C期	近江 白鬚神社絵葉書 白鬚神社々務所発行		(近江)白鬚明神 岩戸
					(近江)白鬚神社
					(近江)白鬚明神 側面の景
					(近江)白鬚明神 全景
					(近江)白鬚社前 灯明台
36	単独	C期	近江湖西 白鬚神社風景		近江白鬚神社全景
					近江白鬚神社より湖上の遠望
					近江白鬚神社
37	単独	C期	近江白鬚神社はがき 白鬚神社社務所発行		近江白鬚神社々頭
					近江白鬚神社境内
					近江白鬚神社 久邇宮殿下御手植樹
					近江白鬚神社 天の岩戸
					近江白鬚神社 名木権
38	単独	D期	近江 白鬚神社絵葉書 社務所発行		白鬚神社全景
					白鬚神社 湖中大鳥居
					白鬚神社 本殿内部(国宝建造物)
					白鬚神社 社殿
					白鬚神社 社務所貴賓室
39	単独	D期	近江 白鬚明神 絵葉書		白鬚神社全景
					白鬚神社々務所
					白鬚神社々務所(貴賓室)
40	単独	D期	近江 白鬚神社絵葉書 白鬚神社々務所発行		白鬚神社全景
					白鬚神社々務所
					白鬚神社々務所(貴賓室)
41	単独	E期	白鬚神社		白鬚神社 湖中大鳥居
					白鬚神社 境内から湖中大鳥居を望む
					白鬚神社 境内社
					白鬚神社 境内社

「類型」欄は、「鳥めぐり」系、「近江十六景」系(十六景と略記)、白鬚神社単独(単独と略記)、その他のセはがきのうち「解説文」欄は、写真とキャプションのほか解説文をとまう場合に○で示した。被写体はの記載やスタンプなどの情報を示した。

扱う資料の発行時期などを一覽した。絵はがきのセットには相互に酷似した商品があるが、ここでは外袋と内容が完全に一致するもの以外は別個とみなし、計四一点を検討対象とした⁽¹⁵⁾。このうち三点が白鬚神社の高橋敬一宮司の提供により、それ以外は筆者所蔵のものである⁽¹⁶⁾。絵はがき一枚単位でみると計四二九枚で、このうち白鬚神社の写真を用いたものは六三枚を数える。

個々の絵はがきは、主に写真とそのキャプションで構成される(これに解説文が加わる場合もある)。一般に觀光名所には定型化した景色といえるものがあるので、絵はがきの写真の傾向を通してこれを読み解くことが可能である。また湖中大鳥居のように現地に劇的な景観の変化が起きている場合、それが絵はがきの写真にどのように反映しているかも検討に値する。以下では、鳥居以外の境内の石造物の紀年銘なども参考にしつつ、白鬚神社の絵はがきの写真に経年的な検討を加えることにしたい。

ここで注意を要するのは、元来、商品としての絵はがき一枚一枚の単品ではなく、数枚から十数枚をセットにした状態で、紙製の袋(以下、外袋)に入れて販売されていたことである。外袋には何らかのタイトルや挿し絵がデザインされるのが普通で、そこから得られる情報は少なくない。さらに商品によってセットにされる絵はがきの種類はさまざまであり、その組み合わせ方法にはある種のストーリーを読み取れることもできる。以上のことから、ここで対象とする資料は、未使用かそれに近いセット状態の絵はがきに限ることとした⁽¹⁷⁾。

周知のとおり、絵はがきは通信面をみることで発行時期を判断することができる⁽¹⁸⁾。これには五つの区分があり、明治三十三年(一九〇〇)十月から明治四十年(一九一〇)三月まで(以下、仮にA期とする)、明治四十年四月から大正七年(一九一八)三月までのもの(B期)、大正七年四月から昭和八年(一九三三)二月までのもの(C期)、昭

和八年二月から昭和二十二年（一九四七）頃のもの（D期）、それ以降のもの（E期）に区別される。表1の絵葉書にはA・B期のものはなく、C期二〇点、D期一三点、E期五点を数える。

本論文の調査は、以下のとおり実施した。まず現地調査として、絵はがきの被写体に関わる白鬚神社境内にある石造物の調査、および現在の白鬚神社宮司である高橋敬一氏への聞き取り調査を行った（本論文で聞き取りに言及する際の話者は、いずれも高橋宮司である）。石造物調査は二〇二二年六月二十六日と同年八月二十二日、聞き取り調査は同年九月二十七日に実施した。並行して、二〇二一年～二〇二三年にかけて白鬚神社を被写体を含む絵はがき資料の収集を進めた。

二、絵はがきセットの種類

白鬚神社の絵はがきの存在形態は、大きく二通りに分けられる。ひとつは、近江一円や琵琶湖各地の名所を広く取り上げたセットのなかに白鬚神社が加えられる場合である。もうひとつは白鬚神社一社をテーマとして、数枚からなる絵はがきセットが制作される場合である（このような特定の神社の絵はがきセットは、滋賀県では比叡山や石山寺などの古刹をはじめ数多くの例がある）。被写体を一覧した表2をもとに、白鬚神社を含む絵はがきセットをいくつかの類型に整理しておく。

「島めぐり」系 西国三十三所の第三十番札所である竹生島をはじめ、多景島、沖の白石といった琵琶湖の島々をとりあげた絵はがきセットに、白鬚神社の一枚が含まれている場合が多い。またこの種のセットには、

湖中大鳥居の誕生

表2 白鬚神社を含む絵はがき

No.	類型	時期	枚数	被写体															
				白鬚	石山	瀬田	粟津	矢橋	三井	唐崎	堅田	比良	竹生島	多景島	白石	舞子	長命寺	汽船	競ヶ岳
1	鳥めぐり	C期	8	○	—	—	—	—	—	—	○	—	○	○	○	○	○	—	—
2	鳥めぐり	C期	8	○	—	—	—	—	—	—	○	—	○2	○	○	○	○	—	—
3	鳥めぐり	C期	8	○	—	—	—	—	—	—	—	—	○2	○	○	○2	○	—	—
4	鳥めぐり	C期	8	○	—	—	—	—	—	—	○	—	○	○	○	○	○	○	—
5	鳥めぐり	C期	7	○	—	—	—	—	—	—	—	—	○2	○	○	○	—	—	○
6	鳥めぐり	C期	8	○	—	—	—	—	—	—	—	—	○2	○	○	○	○	○	—
7	鳥めぐり	C期	10	○	—	—	—	—	—	—	○	—	○	○2	○	○2	○	○	—
8	鳥めぐり	C期	7	○	—	—	—	—	—	○	○	—	○	○	—	○	○	—	—
9	鳥めぐり	C期	7	○	—	—	—	—	—	—	—	—	○	○	○	○	○	—	—
10	鳥めぐり	C期	8	○	—	—	—	—	—	—	○	—	○	○	○	○	○	○	—
11	鳥めぐり	D期	7	○	—	—	—	—	—	—	—	—	○2	○	○	—	○	—	—
12	鳥めぐり	D期	7	○	—	—	—	—	—	—	—	—	○	○	○	—	○	○	—
13	鳥めぐり	E期	5	○	—	—	—	—	—	—	—	—	○	○	○	—	○	—	—
14	鳥めぐり	不明	4	△	—	—	—	—	—	—	—	—	△	○	—	△	○	△	—
15	十六景	C期	16	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○2	○	○	○	○	○	—
16	十六景	C期	14	○	○	—	—	○	○	○	○	○	○2	○	○	○	○	—	○
17	十六景	C期	16	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○2	○	○	○	○	—	○
18	十六景	C期	13	○	—	—	—	○	○	○	○	○	○2	○	○	○	○	—	—
19	十六景	C期	15	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
20	十六景	C期	16	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○2	○	○	○	○	—	○
21	十六景	D期	16	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○2	—
22	十六景	D期	16	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○2	○	○	○	○	○	—
23	十六景	D期	16	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○2	○	○	○	○	—	○
24	十六景	D期	9	○	○	—	—	○	○	○	—	○	○	○	○	—	—	—	—
25	十六景	E期	16	○	○	—	—	○	○	○	—	○2	○	○	○	—	○	—	○
26	十六景	不明	10	△	△	△	△	△	△	△	△	△3	△	△	△	△	△	△	△
27	変則	D期	8	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○6	—	—	—
28	変則	D期	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	△	△	—	△2	—	△2
29	変則	D期	6	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	○
30	変則	D期	6	△	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
31	変則	E期	14	○	○	—	—	—	○	—	○	○	—	—	—	—	○	—	○
32	変則	E期	7	○	○	—	—	—	○	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—
33	変則	不明	50	○	○	○	○	○	○2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
34	不明	C期	3	○	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	○
35	単独	C期	5	○5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
36	単独	C期	5	○4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—
37	単独	C期	5	○5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
38	単独	D期	5	○5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
39	単独	D期	3	○3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
40	単独	D期	3	○3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
41	単独	E期	4	○4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

「被写体」欄は、当該被写体が含まれる場合は○、含まれない場合は「—」で示し、複数が含まれる場合は「○2」（同じ地点の矢橋帰帆→矢橋、三井晩鐘→三井、唐崎夜雨→唐崎、堅田落雁→堅田、比良暮雪→比良、沖の白石→白石、近江舞子→舞子、各種絵はがきのなかには、主たる写真1枚を用いる場合のほかに、①主たる写真に加えて別の小形の写真をレイアウトする場合、②画①については、補足的な被写体は○では示さず、備考欄に「～を含む」と注記した。②については各被写体欄に△で示した。③に

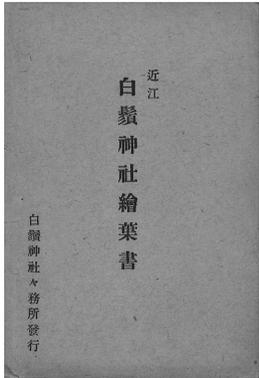


図3 白鬚神社単独の絵はがきセットの外袋の一例 (No.35)



図2 「近江十六景」系絵はがきセットの外袋の一例 (No.21)



図1 「鳥めぐり」系絵はがきセットの外袋の一例 (No.2)

観光地曳網や水泳場で売り出しつつあった近江舞子と、西国第三十一番の長命寺が随伴する傾向がある。タイトルには「鳥めぐり」(図1)の表現が多く、「琵琶湖」もそれに次ぐ。ここでは仮に「鳥めぐり」系とよんでおく。ただしタイトルには例外も多く、必ずしも内容構成と一対一に対応するわけではない。

「近江十六景」系 伝統的な近江八景の絵はがきは八枚セットが普通で、近江・琵琶湖地域ではおそらくこれがかつとも大量に制作、販売された商品である。⁽¹⁹⁾ところが伝統的な近江八景を残しつつ、そこに上述の「鳥めぐり」系を合体させたような構成のセットもかなりの量にのぼる。⁽²⁰⁾必然的にこの種のセットは枚数が一六枚程度と多めになる。タイトルは「琵琶湖十六景」(図2)や「近江十二景」(No.23)のように近江八景のアレンジを思わせるものがあるが、ばらつきも多い。ここでは「近江十六景」系とよんでおく。

白鬚神社単独 白鬚神社一社を単独で取り上げたセットは、現時点では七点を確認しえた。このうちNo.35・No.38の発行者は白鬚神社社務所である(図3)。No.37・No.40・No.41は白鬚神社の

現地に保管されていたものであり、発行者はやはり社務所である。またNo.39は外袋こそ異なるが内容はNo.40と同一である。聞き取りによると、過去には社務所でお守りなどとあわせて絵はがきを扱っていたという(写真4)。これらの点から、白鬚神社単独のセットは同社自身が制作していたものと考えられる。

変則的なセット 以上に述べた以外に、量的には例外といえるが、いくつかの変則的なセットがある。そのひとつは「近江舞子」(No.27)や「高鳥」(No.30)のように、近隣地域の特定のテーマで制作されたセットに白鬚神社が加わった例である。そのほか、五〇枚(No.33)や三〇枚(No.28)など、名所を網羅した大部なセットにも白鬚神社が入ることがある。比較的最近の商品には、琵琶湖大橋や高速道路といった従来にないスポットを交え、目新しい観点で編集された例が現れる(No.29・No.31・No.32)。

以上、表示した絵はがきセットを類型ごとに見ると、「島めぐり」系が一四点、「近江十六景」系が一二点を数える。ここでいう「近江十六景」系とは、繰り返し述べると、伝統的な近江八景の絵はがきに「島めぐり」系のセットを単純に合体させた構成である。そこで注意されるのは、伝統的な近江八景のセットに白鬚神社が



写真4 白鬚神社社務所の看板。取扱品目左端に、元は「絵はがき」の文字がある(2022年8月22日、田中知音撮影)

単体で混入するような事例は存在しないことである。つまり白鬚神社単独のセットを別にすると、白鬚神社の絵はがきはつねに「島めぐり」系の一枚として編集されているのである。⁽²¹⁾

時期的な傾向をみると、ここで扱う絵はがきセットにはA期とB期のものを欠いている。⁽²²⁾ 伝統的な近江八景の絵はがきであれば、A～B期にも多数が制作されているので、白鬚神社を含む「島めぐり」系(およびその拡大版としての「近江十六景」系)の絵はがきは、相対的に後発のものだといえる。一方、C期には「島めぐり」系が多く、やや遅れてD期には「近江十六景」系も増加する。ではこのC期(大正七年～昭和八年)に、「島めぐり」系絵はがきが増加する背景とは何であろうか。

湖上遊覧の歴史のなかで、C期が含まれる大正年間には、観光船の定期運航の開始や大形遊覧船の就航をみた時期として知られている。⁽²³⁾ これを考慮すると、「島めぐり」は絵はがき上の設定にとどまらず、現実の観光ルートを表示したものとみるべきであろう。実際に、白鬚神社に随伴する、近江舞子、竹生島、長命寺といった地点は、いずれも「島めぐり」航路の目的地や寄港地になっていた。⁽²⁴⁾ つまり絵はがきを構成する被写体は、ほぼそのまま汽船による遊覧ルート上に点在する観光地だったのである。

すでに述べた近江八景見物が、琵琶湖全体からみれば南湖周辺の狭い範囲に限られるのに対し、「島めぐり」遊覧は北湖を含む琵琶湖全域を周遊するもので、在来の参詣スポットである竹生島や長命寺もこれに接続された形である。航路の詳細については後述することにしたが、「湖国を訪れる団体遊覧客も激増し、まさに遊覧船闊歩の時代を現出した」⁽²⁵⁾とまでいわれる大正年間にあつて、船上から景色を眺めるといふ新しい「まなざし」が、どのような絵はがきの光景を新たに生み出したのが問題になるであろう。

なお、絵はがき自体に遊覧船との関わりがつけに明記されているわけではないことには一応の注意を要する。ただ汽船そのものが被写体になる例も多いことなどは、絵はがきと遊覧船による観光との結びつきを十分に示唆している。少数ながら、汽船会社が「島めぐり」の記念絵はがき(No.14)を制作しているのは、遊覧客の土産であった可能性が高い。また湖上遊覧を示すスタンプが散見することも(No.1・2・10など)、絵はがきが汽船の旅の途上で購入されたことを示している。

四、被写体の類型とその推移

つぎに写真の内容を検討しよう。ここでは白鬚神社の絵はがきの写真を、①社殿正面を北側(右斜め)から、②社殿正面を南側(左斜め)から、③湖岸から社殿にかけての一带を北側(右斜め)から、④社殿一带を湖上から、⑤湖中大鳥居を社殿側から、それぞれ撮影したものに分類し、⑥いずれにも該当しない写真を含めて、表3に時期ごとの数を示した。そのうち白鬚神社単独のセットに含まれる事例数を()内に併記した。後述するよう、これは当該写真一枚で「白鬚神社らしさ」を代表できるかどうかの指標となるためである。

①社殿正面を北側(右斜め)からみた光景の絵はがき(図4)は八例ある。鳥居、狛犬、後方の拝殿を画角に収め、本殿の一部もわずかにみえる。八例のうち半数は白鬚神社単独のセットに含まれている。ちなみに現在の景観(写真5)と比較すると、現在より拝殿と鳥居の距離が近いこと、鳥居そのものが異なること、⁽²⁶⁾ 当時は鳥居の内外で地面の高さが同じであるのに対して現在は新しい道路路によって段差が生じていること、などの違いを

表3 白鬚神社の被写体の類型と推移

時期	被写体の類型					
	①	②	③	④	⑤	⑥
C期	5(3)	3(1)	10(1)	6(2)	0(0)	7(7)
D期	3(1)	2(0)	3(0)	5(3)	2(1)	6(6)
E期	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)	5(1)	2(2)
不明	0(0)	0(0)	1(0)	2(0)	0(0)	0(0)
計	8(4)	5(1)	14(1)	14(6)	7(2)	15(15)

表1のうち、白鬚神社の被写体に関する情報を時期ごとに一覧した。①～⑥の類型は本文参照。()内は、白鬚神社単独のセットに含まれる絵はがきの枚数を示す。



図4 社殿正面を北側(右斜め)から撮影した写真の絵はがき(No.2の一部)

見て取ることができる。

②社殿正面を南側(左斜め)からみた光景の絵はがき(図5)は五例ある。被写体の構成に①と大差はないが、このうち二例(No.8・21)は、祭礼日にあたるのであろうか、拝殿前から鳥居付近に集まる参詣客の写真を用いている(図5)。中央で静止した和装の少女が印象的である。それ以外の三例のうち一例は白鬚神社単独のセッ



写真5 現在の白鬚神社拝殿前の光景(便宜上南側より、2022年6月26日、田中知音撮影)



図5 社殿正面を南側(左斜め)から撮影した写真の絵はがき(No.8の一部)

トに含まれている。数の上では、②の絵はがきは①よりさらに少なく、この種の写真が白鬚神社の景観を代表するものとして扱われていた形跡は見いだせない。

③湖岸から社殿にかけての一带を北側(右斜め)からみた光景の絵はがき(図6・図7)は一四例と多い。この③のほとんどは、「島めぐり」系や「近江十六景」系の一枚として採用されており、とくにC期に増える「島め

「ぐり」系では代表的な被写体である。目を引くのは、境内と湖岸を隔てる堅固な波除石である。現在(写真6)はこの石垣はなく、舗装道路を自動車が行きかい、境内には横断事故防止のために作られた展望台がある。また湖岸線は明らかに前進し、往時の湖面と境内の間を道路が分断する形になっている。⁽²⁷⁾

熟視すると、③は少々奇妙な写真である。鳥居と拝殿をほぼ真横という不自然な角度から写しているため、



図6 湖岸から社殿にかけての一带を北側(右斜め)から撮影した写真の絵はがき(No.20の一部)



図7 湖岸から社殿にかけての一带を北側(右斜め)から撮影した写真の絵はがき(No.10の一部)



写真6 現在の白鬚神社鳥居前の光景
(2022年6月26日、田中知音撮影)

肝心の社殿の形状が分かりにくい。これは地形的な制約があるなかで、湖を入れる構図に苦慮した結果であろう。また湖岸に和船が写し込まれているのも興味深い。図6では大きな荷がのせられ、その手前では、岸から沖に渡した橋板に人が乗っている。図7ではぎっしりとハサ掛けが行われている。湖面と砂浜に意味をもたせ、湖と神社のつながりを強調しようとした意図を読み取ることができる。

④社殿一帯を湖上からみた光景の絵はがき(図8・9)も計一四例を数える。このうち白鬚神社単独のセットに含まれるのは六例である。水平に長々と延びる波除石、その石垣越しにみえる社殿と背後の山並みが、独特の景観を作り出している。視点は沖合にあるので、明らかに船上から撮影された写真である。視点や角度は一定ではないが、図8に示すように、かなり遠距離から水面が大きく映り込むように撮影されている。なお旧鳥居建設後のD・E期には、図9のように湖中大鳥居を写し込んだものが三例ある(No.30・No.38・No.41)。

現在は、上述のように波除石は撤去され、湖岸と境内の間には幹線道路が走り、神域は水陸に分断された形になっている。絵はがき写真の段階では、湖面から湖中大鳥居、汀線、砂浜、そして境内、社殿、後背の社叢までがあたかも一連の神域であ

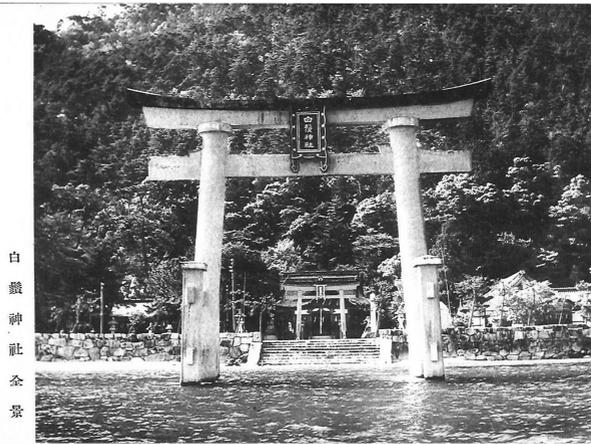
ると一目で理解することができる。これに対して現在では、かりに沖合から白鬚神社を撮影したとしても、広い路上を自動車が多く行きかっていることから、湖中大鳥居から社殿までをひとつの景観とみることは難しいかもしれない。

以上の4種はC期とD期を通してみられるが、つぎに示す⑤社殿側から湖中大鳥居をみた光景の絵はがき



時神明るせ出斗に中湖てしに立前の上天仁垂 社神鬚白るた見りよ上湖(所名湖琵琶)
すなと狂能に實望眺で面湖しと艦轟杉松しと々鏡殿社ひあで名有しと神の壽長りあに

図8 社殿側から湖上から撮影した写真の絵はがき (No.9の一部)



白鬚神社全景

図9 社殿側から湖上から撮影した写真の絵はがき 湖中大鳥居入り (No.38の一部)



(湖中) 白鬚明神浜の大鳥居 A Torii of Shirahige-myojin Beach (Lake Biwa)

図10 湖中大鳥居を社殿側から撮影した写真の絵はがき
(No.13の一部)

(図10)は、旧鳥居造立後にかかるD期に現れ、その後のE期に増加する。計七例のうち二例は白鬚神社単独のセットに含まれている。④に比べて視点は陸地へと転換し、境内側から湖中大鳥居(旧鳥居)をとらえている。これは最近の観光情報サイト等に用いられているアングルとほぼ同じである。沖合を進む汽船を含む写真を用いたものも二例(No.13・No.25)ある。

なお、⑥以上のいずれにも該当しない光景の絵はがきも多いが、これらはいずれも白鬚神社単独のセットを構成するものである。内容は、境内の岩戸、灯明台、本殿内部の様子、社務所内部の様子など多種にわたる。ただし、これらは一枚のみで「島めぐり」系ないし「近江十六景」系セットに採用されるわけではなく、あくまで白鬚神社単独のセットに散発的に盛り込まれるにとどまる。換言すると、その一枚で白鬚神社を代表できるほどの典型的な被写体とはいえないものである。

この⑥を基準として見直すと、①～⑤の写真の絵はがきが、「島めぐり」系ないし「近江十六景」系の一枚になりえているか、または白鬚神社単独のセットに含まれるにすぎないかという違いは大きい。まず①②のように社頭をとらえた写真は、一見無難で、典型的な扱いを受けてよいアングルに思えるが、実際には「島め

ぐり」系や「近江十六景」系にこの一枚がとられる例は乏しい。絵はがきにおける「白鬚神社らしさ」は、主に③に期待され、C期の「島めぐり」系の一枚として頻繁に採用されたことがわかる。

湖中大鳥居の扱いという観点から注目されるのは④と⑤である。前述したとおり、昭和十二年の旧鳥居の建造後のD期には④に湖中大鳥居が写し込まれるようになり、E期になると陸地側から湖中大鳥居を狙った⑤のカットへとゆるやかに移行していく。これらは旧鳥居が絵はがきに速やかに採用されたことを示しているが、逆にいえば、湖中大鳥居の建造以前から、沖合から白鬚神社を遠望するアングルの④の写真が好まれていた事実をどのように考えるかという問題が浮上することになる。

五、湖中大鳥居と湖上遊覧

以上の議論をふまえ、つぎに検討したいのは、湖上から社殿一帯を遠望した④のタイプの写真の絵はがきの位置付けである。これは思い切った引きの写真で、湖面が大きく映り込み、神社はむしろ点景に近い印象を受ける。湖上の島などを被写体にする際には、全景を収めるのによく用いられるアングルであるが、陸上の小さい建物を狙うには異例のものというべきであろう。このタイプの絵はがき写真を理解するには、当時の湖上観光の動向を考慮に入れる必要があると思われる。

「島めぐり」系や「近江十六景」系の絵はがきにおいて、白鬚神社が竹生島・多景島・沖の白石・近江舞子・長命寺とひとまとまりの扱いを受けていること、およびこれらが正年間に活況を呈する汽船会社の「島め

ぐり」の航路上にあることは、さきに述べたとおりである。図11に示したのは、大正十一年（一九二二）に建造された新鋭の純遊覧船「みどり丸」の航路図であるが、これによると遊覧の航路は浜大津から湖西沖を通過し、近江舞子、竹生島、長命寺の順に寄港するというルートになっている。

この航路図で注意されるのは、白鬚神社に寄港するルートが示されていないことである。これは「みどり丸」にかぎらず、明治期〜昭和戦後期の各社の航路全般にあてはまる特徴である。白鬚神社は、上陸して一定時間を過ごすような寄港地ではなかったのである。言い換えると、白鬚神社は、琵琶湖観光と大きな結びつきがあったにもかかわらず、実際にはその沖を船で通過するのみで、どちらかというとき多景島や沖の白石と同じ扱いであったことが判明するのである。

この事実から考えると、湖上から遠望する白鬚神社というタイプ④の被写体とは、とりもなおさず沖合を通過する湖上遊覧船から眺めた白鬚神社のすがたであったと考えてよい。そしてこの船から遠望した境内の光景が、「島めぐり」系の絵はがきが相次いで制作された大正期以降に、「白鬚神社らしさ」を表した写真となって広まったのである。白鬚神社の側からいえば、近世以来の石造物などに表れていたような参詣や信仰の対象から、「沖から眺める」対象というまったく新しい属性を身につけるに至ったといえる。

もとよりC期の「島めぐり」系絵はがきの段階では、まだ湖中大鳥居は存在していない。したがって沖から（船から）神社を眺めるといふまなざしは、昭和十二年の旧鳥居建設を契機として生じたわけではないことに注意する必要がある。汽船観光の活発化する大正年間に、白鬚神社自体に対して、琵琶湖から眺めるという性質が付与されたものと考えるべきであろう。順序からいけば、湖中大鳥居が「沖から眺める」まなざしを生み出

したのではなく、船上からのまなざしのなかに湖中大鳥居が埋め込まれたのである。

前述のように、タイプ④の写真の絵はがきは、湖中大鳥居がまだない時期から、その後に旧鳥居が建立された後の時期を通して制作されている。この点からも、湖上に登場した旧鳥居が速やかに観光客の視線を引き付け、船上からの眺めに朱の彩りを添えたことは明らかである。ここで湖中大鳥居には、参道の入り口といったような通常の鳥居がそなえる意味は当初から存在せず、あくまで従来の船上からのまなざしの延長上で、鳥居自体が「沖から眺める」もの、あるいは沖の船に対して見せるものであったと考えなくてはならない。

六、むすび

現在、白鬚神社を訪れる観光客の多くは湖中大鳥居を目当てにしている。聞き取りによると、平成二十七年(二〇一五)に白鬚神社を含む⁽³⁰⁾一帯が日本遺産として認定されたのが契機となつて観光客が激増し、被写体としての湖中大鳥居が一段と注目を集めるようになったという。しかし本来、白鬚神社に対するイメージとは、現在のような珍しい鳥居のある神社というわけではなかった。この状況に至るまでには、白鬚神社をめぐる「まなざし」に幾度かの変転があったことを、絵はがきによる考察から明らかにすることができた。

近世から広域の信仰圏を有した白鬚神社にとって、大正年間ころに活発化する湖上遊覧は、沖合を通過する汽船から眺める神社というまったく新しい属性が付与される契機となった。湖中大鳥居は、伝説的な存在であったものが昭和十二年に「復興」されたという経緯があるが、これにより湖上からの神社の眺めには彩りが加

わり、「島めぐり」航路の名所として地位を占めていく。その後、湖中大鳥居に対する視線は陸上からのものへと転換し、徐々に珍しい鳥居というイメージが単独で発信されるようになったと考えられる。

なお今日の琵琶湖の観光と引き比べて考えると、琵琶湖に浮かぶ有人島である沖島をただちに想起するところであるが、「島めぐり」系に限らず近江・琵琶湖の絵はがき一般のなかで沖島が被写体となることはきわめて稀である。これはとりもなおさず沖島が観光地とみなされるのが比較的近近のできごとであることに関連しているよう。見方をかえると、「島めぐり」系絵はがきに必ずといってよいほど含まれる多景島と沖の白石といった無人島がどのように「発見」されたのかも追究の余地がある。

いずれにしても、近世的な名所は近代に入るとさまざまな契機で変容を余儀なくされる。「島めぐり」による新たな観光ルートの開発もそのひとつの要因であり、船上から眺める観光スポットといふべきものをいくつか生み出した。白鬚神社の湖中大鳥居は、まさに船からの視線の所産であったといえる。もとよりこの鳥居に人々が何を期待したかは、絵はがきのみで十分明らかになるわけではない。鳥居の建造過程に関わる行政文書、当時の旅行者の書き残した資料、汽船会社の出版物などを活用した考察は今後の課題としたい。

注

- (1) 高島町史編さん室編『高島町史』（高島町役場、一九八三年）、一六一ページ。
- (2) たとえば、公益社団法人びわ湖高島観光協会「びわ湖高島観光ガイド」(https://takashima-kanko.jp/spot/2018/06/post_89.html、二〇一三年二月四日最終閲覧)。

- (3) ただし現在は、後述する交通安全確保上の理由から、この角度で湖中大鳥居を撮影することはできなくなっている。
- (4) たとえば、二〇二二年五月二十五日の京都新聞記事「死亡事故も発生、湖上の大鳥居で有名な滋賀・白鬚神社 観光と安全両立へ対策」(<https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/799181>、二〇二二年一月四日最終閲覧)。
- (5) たとえば、二〇二二年十二月十一日の中日新聞記事「鳥居撮影のための国道横断やめて 高島・白鬚神社前で死亡事故」(<https://www.chunichi.co.jp/article/381994>、二〇二三年二月四日最終閲覧)。
- (6) 白鬚神社社務所「近江最古の大社白鬚神社」(<http://shirahigeinja.com/%e6%99%96%e4%b8%ad%e9%b3%a5%e5%b1%85%e3%83%bb%e5%a2%83%e5%86%85/kofyutor-i/>、二〇一三年二月四日最終閲覧)による。
- (7) 近江八景は、比良暮雪(ひらのぼせつ)、堅田落雁(かたたのらくがん)、唐崎夜雨(からさきのやう)、三井晚鐘(みのばんしょう)、粟津晴嵐(あわづのせいらん)、矢橋帰帆(やばせのきはん)、瀬田夕照(せたのせきしょう)、石山秋月(いしやまのしゅうげつ)の八つの勝景で構成される。比良山地を総体として扱った比良暮雪を別にすると、その分布は琵琶湖岸のなかでも南湖周辺に集中している。近世に確立したこの近江八景のなかに白鬚神社が含まれることはない。
- (8) 鍛冶宏介「近江八景詩歌の伝播と受容」(『史料』九六(二)、二〇一三年)、三四ページ。
- (9) 青柳周一「十七・十八世紀における近江八景の展開―近世の名所の成立をめぐって」(青柳周一ほか編『地域のひろがり』と宗教(近世の宗教と社会二) 吉川弘文館、二〇〇八年)など。
- (10) これにふれたものとして以下の文献がある。琵琶湖汽船株式会社編『琵琶湖汽船100年史』(琵琶湖汽船株式会社、一九八七年)、五五ページ。『新修大津市史五 近代』(大津市役所、一九八二年)、三四九ページ。大津市歴史博物館編『琵琶湖観光の幕開け―特別陳列図録』(大津市歴史博物館、一九九九年)、九―一三ページ。ほかに近現代の絵画資料を扱ったものに、滋賀県立近代美術館編『現代の近江八景』(滋賀県立近代美術館、一九九三年)がある。
- (11) 木津勝「絵葉書で見る近江八景」(『近江地方史研究』三七、二〇〇五年)、四九ページ。
- (12) これらの組織は「若州小浜 市場講」(享保十一年銘)、「長寿講」(天保九年銘)などを名乗っている。灯籠以外に、

後述する絵はがきの被写体にもなる拝殿前の狛犬(大正三年銘、「京都上組延壽講」による寄進)、拝殿右の手水鉢(明治十四年銘、「京都延齡社中」による寄進)などの例がある。

(13) 銘文の原文は以下のとおりである。「古来琵琶湖西岸白沙青松之間有白鬚神社／奉祀猿田彦命焉華表在于湖中由水之増減／而隱蹟旧記所伝不一藏神秘於冥々中矣大／阪篤志家小西久兵衛氏嘆其朽糜新建之於／湖中以獻神前洵可謂美舉也是不独慰神靈／亦可以風勵人心矣乃勒之于碑云爾／昭和十二年十月／正四位勲三等成田軍平撰書」。

(14) 先行研究によると、もともと鳥居が「湖中にあつた」との言い伝えは、白鬚神社の所蔵する「白鬚明神縁起絵巻」に所見がある。すなわち康安元年(一三六一)に神社の前に二町ほどの石の橋が現れ、永祿五年(一五六二)には石の神門が一町ほど沖に突然出現したという(千野香織・西和夫『フィクションとしての絵画―美術史の眼建築史の眼』(ベリかん社、一九九七年)、七二―七三ページ)。前者については、康安二年(一三六二)の地震で水位が低下し、橋や鳥居が湖中に出現したという『太平記』の記事に対応している(同、七三ページ)。また『江源武鑑』の永祿六年(一五六三)九月十九日の条にも「白鬚大明神、前湖壱丁汀石ノ鳥居ヲ顕ス、同廿四日失スト」と記されている(谷川健一編『日本の神々―神社と聖地 第五卷 山城・近江』(白水社、一九八六年)、三五―ページ)。さらに白鬚神社を描いた絵画資料「近江名所図屏風」も、白鬚神社の前の湖中にあざやかな朱色の鳥居が描かれていることで知られるが、上述の千野と西によれば、そこには近世の近江八景が確立する以前から、謡曲『白鬚』などの影響もあって白鬚神社が一定の知名度を誇っていたことに関連があるという(前掲、千野・西『フィクションとしての絵画―美術史の眼建築史の眼』、七二ページ)。こうした知見からみて、中世の段階で白鬚神社には湖中鳥居をめぐる一種の神話が存在し、かつ絵図等にも表現されるなど広く知られていたことは間違いない。一方で、現地の言い伝えとしてはどうであったのか、また近世く近代を通してどのようにこの説話が受け継がれてきたのかといった点はなお追究の余地がある。

(15) したがって同一の外袋を用いながら内容は異なる例(No.35とNo.40)や、外袋は異なるが内容の絵はがきまったく同一である例(No.16とNo.17、No.39とNo.40)は、別個の扱いとした。これは酷似するセットが流通するという事実自体が、そのタイプの絵はがきセットが好まれたことを示すものとも想定されるためである。とはいえ当時流通していた絵は

がきの「種類」をどのように規定するかは難しい問題である上、個々のセットの販売量などは当然考慮することはできないことも、本論文における分析手法上の制約のひとつといわざるをえない。

- (16) したがって資料の収集にはおのずと限界があり、本稿で扱う点数も便宜的なものにすぎない。この点からも明らかに、絵はがきは地域の歴史的資料として有意義ではあるが、反面で問題点もある。それはいまのところ体系的な絵はがきの収集や公開が十分に行われておらず、一部の先進的な取り組みを別にすると、研究者が独力で入手するか、または個人の収集品に依拠する形で研究が進められている点である。幸いなことに、絵はがきは古書店やインターネットオークション等で大量に流通しており、安価かつ容易に資料を収集することが可能ではあるが、ゆくゆくは地域博物館等を主体としたそれらのコレクション化とデータベース公開が望ましいことはいうまでもない。

- (17) 単体で残された、あるいは使用(実運)された絵はがき資料では、セット状態の絵はがきもつ文脈的な情報が失われているので、ここでは対象から除外することとした。ただし厳密に述べると、セット状態で残された絵はがきについて、それが販売された当初と同じ完全品なのか、そのうちの若干枚数は使用されて欠落している不完全品なのかを特定する手段はない。したがって特定の被写体が「ない」ことを論じる際には十分な注意を要する。

- (18) 各期の識別方法は以下のとおりである。A期は通信面に罫線が引かれていない。B期は通信面の下三分の一の位置に罫線が引かれている。C期は通信面の中央(二分の一)の位置に線が引かれている。D期は文字がそれまでの「きか郵便」から「きが郵便」になっている。E期は「郵便はがき」と左横書きされるようになる。以上は、学習院大史料館編『絵葉書で読み解く大正時代』(彩流社、二〇二一年)、一八ページなどによる。これ以外にも被写体や解説文等によって年代を絞り込むことは不可能ではないが、本論文では量的な考察を加える観点から、C～Eの四段階による区分で必要十分と考え、個々の絵はがきの年代の厳密な考証は省くこととした。

- (19) 前掲、木津「絵葉書で見る近江八景」、四七ページ。以下、このような伝統的な近江八景の各景をそのまま八枚一組の絵はがきセットに仕立てたものを、便宜的に「伝統的な近江八景の絵はがき」とよぶことにする。

- (20) この際の組み合わせ方法は、伝統的な近江八景と「島めぐり系」を機械的に合体させたと考えるものが非常に多い。

変則的な組み合わせとしては、「八景」といいつつ画面を二分割して計二〇の被写体を盛り込んだ例(No.26)などがみられる。

(21) 付言すると、「島めぐり」系にせよ、「近江十六景」系にせよ、白鬚神社の絵はがきが二枚入ることはない。したがって、これらのセットに入る白鬚神社の絵はがきの被写体は、その一カットで「白鬚神社」らしさを体現する必要があるといえる。この点は後述する被写体の検討を参照。

(22) ただしこれまでの資料収集過程でも、B期に属する白鬚神社の絵はがきが単品で残された事例は、少なからず見出すことができる。したがって当該期を含めた量的な推移についてはなお検証の余地があるが、大勢としてはC期に「島めぐり」系が増加する傾向は動かせないものと思われる。

(23) 前掲、琵琶湖汽船株式会社編『琵琶湖汽船100年史』、五五～五六ページ。

(24) 前掲、琵琶湖汽船株式会社編『琵琶湖汽船100年史』、五四～五七ページ。なお後述する太湖汽船「みどり丸」の航路図も参照。

(25) 前掲、琵琶湖汽船株式会社編『琵琶湖汽船100年史』、五六ページ。

(26) 現在の鳥居は昭和五十六年(一九八二)三月に奉納されており、絵葉書に写る鳥居は、現在の鳥居以前のものである。(27) これ以外に読み取れる変化には以下のようなものがある。①鳥居付近の狛犬は、絵葉書では鳥居の間近にあるが、現在では鳥居と狛犬の距離が離れている。この狛犬が奉獻されたのは大正三年(一九一四)六月であることから、現在の狛犬は絵葉書の段階のものと同じで、位置関係の変化は鳥居が前進したことによるものと思われる。②現在ではこの鳥居の横に白鬚神社と刻まれた至高約四メートルの社号標石がある。こちらは昭和七年(一九三二)十月に奉獻されているので、C期の絵はがきにはまだ現れない。③絵葉書で社殿の後方に木々が生い茂っている場所は、今は参拝者の駐車場となっている。④そのほか燈籠の配列にも若干の差を生じている。

(28) 太湖汽船株式会社「琵琶湖遊覧御案内」による(筆者所蔵)。汽船会社のこの種のパンフレットには必ず航路図や観光案内が掲載されており価値が高いが、発行年の記載を欠くものが多い。本資料は、解説文中に「本年十月一日より

同三十日迄竹生島開創一千二百年紀念大法会執行汽船増発」云々とあることから、大正十三年（一九二四）前後に発行されたものと判断できる。

(29) 図示した航路図は、実際にはカラー印刷で、坂本・堅田・和邇など湖西の各所に寄港するコース(定期船)は青色、浜大津↓近江舞子↓竹生島へと向かうコース(遊覧船)は赤色で示されている。「白鬚神社」はランドマークのひとつとして記載されているものの、いずれも寄港地にはなっていない。なお前掲、『琵琶湖汽船100年史』には、明治二〇年前後、明治末期、昭和六二年と各年代の航路図が掲載されているが、いずれも白鬚神社やその近辺を寄港地とするものはない。

(30) 「琵琶湖とその水辺景観―祈りと暮らしの水遺産」。ちなみに日本遺産「水の文化」ツーリズム推進協議会が制作・公開しているパンフレットでも、幻想的な湖中大鳥居の写真が大々的に用いられている (<https://ja.iwako-visitors.jp/japan-heritage/design/img/top/pamph.pdf> 二〇一三年二月十日最終閲覧)。

(31) 本論文の範囲では、この視点の転換の背景を特定するに至っていないが、おそらく湖上遊覧が全般的に下火になったことや、国道の整備等で白鬚神社自体が自家用車や観光バスで訪れる場所になっていくことなどが介在しているものと思われる。

付記

本論文は、田中知音が二〇一三年一月に本学人文学部歴史文化学科に提出した卒業論文「湖中大鳥居の誕生―絵葉書にみる白鬚神社の過去と現在」をもとに、指導教員である渡部と田中が大幅に資料を補った上で、渡部が全般的に改稿を施したものです。調査の過程では、白鬚神社宮司の高橋敬一様、ならびに社務所の各位に多大なご高配を賜りました。明記してお礼申し上げます。なお石造物の現地調査は、杉山紗南さん、長谷川ひかりさん、古谷涼さんと渡部・田中の共同で実施し、卒業論文の改稿段階の資料整理では杉山紗南さんの補助を得ました。また資料整理の過程で、JSPS 科研費(18K01184)の一部を使用しました。

和文要約

白鬚神社(滋賀県高島市鶴川)の沖合に立つ鳥居(湖中大鳥居)は、もともと伝説的な存在であったものが昭和12年(1937)に建造され、現在では琵琶湖を代表する観光スポットとして注目を集めている。しかしながら、これまでの琵琶湖観光の歴史的研究では、この湖中大鳥居が何のために建造されたかについて論じられてこなかった。

本論文では、観光客の土産物として大量に制作された絵はがきに基づき、湖中大鳥居の建設の意義を明らかにすることを目的とする。まず白鬚神社を含む絵はがきセットの内容構成の類型とその歴史的背景を検討し、つぎに白鬚神社において被写体として選ばれる光景の特徴、およびそこでの湖中大鳥居の位置付けを分析した。

その結果、白鬚神社をめぐる「まなごし」に幾度かの変転があったことが明らかになった。白鬚神社は近世から広域の信仰圏を有する著名な神社であったが、近代になると、大正年間に琵琶湖を汽船で周遊する湖上遊覧が活発化したことで、神社の沖を通過する観光船から眺める神社というまったく新しい属性が生み出されたことが、湖中大鳥居を出現させた動機であった。

湖中大鳥居は、当初から「沖からの眺め」の一部であり、沖の観光船に対して見せるものとして造られたものであったと考えられる。言い換えると、湖中大鳥居が「沖からの眺め」というまなごしを生み出したというより、船上からのまなごしのなかに湖中大鳥居の美しい朱の彩りが埋め込まれたのである。

The birth of the “floating torii gate”: Analyzing picture postcards of Shirahige Shrine

TANAKA, Chion & WATANABE, Keiichi

Abstract

The “floating torii gate” constructed in Lake Biwa near Shirahige Shrine (Ukawa, Takashima City, Shiga Prefecture) is considered legendary but was actually erected in 1937. Currently, it is one of the most popular tourist spots associated with Lake Biwa. However, the issue of why this torii gate was constructed has yet to be taken up in the historical research related to Lake Biwa tourism.

This study aims to discover the significance of the torii gate on the basis of the numerous picture postcards that have been produced as souvenirs for tourists. First, we examined the contents of picture postcard sets that depict Shirahige Shrine and investigated their historical background. Next, we analyzed the characteristics of the scenery of Shirahige Shrine that was selected for the illustrations and the position of the torii gate as shown in the illustrations.

The results indicated that the “way of looking at” Shirahige Shrine has changed several times. Shirahige Shrine has been a notable focus of a wide range of beliefs since the early modern period. However, in the Taishō era (1912-1926) of the modern period, lake excursions on steamships became popular on Lake Biwa. As a result, a completely new manner of viewing the shrine from a sightseeing ship arose. The view of the shrine from the deck of a ship is thought to have been the impetus behind the construction of the “floating torii gate.”

From the beginning, the floating torii gate was intended to be a part of the view of the shrine from the water, and it is believed to have been constructed specifically with the view from tourist ships in mind. In other words, rather than the floating torii gate leading to the birth of the “view of the shrine from the water,” a more correct

description would be that the floating torii gate is a beautiful vermilion accent embedded into the view of the shrine from the deck of a ship.